

その他、末成道男の「韓国と中国漢族の大小リニージの比較」は、韓国における二つの調査地の事例、台湾における二つの調査地の事例、あわせて四つの事例を比較検討するという形で、一つの村落の事例の分析という次元をこえて、韓国のリニージの一般的特徴を抽出しようと試みたものである。

津波高志の「済州島の通婚圏」と櫻井哲男の「ソリの展開」は、ともに済州島の一村落の集約的な調査によるデータをもとに議論を展開したものである。このうち櫻井の論文は、一つの集落において綿密な情報を集めるという点では人類学のオーソドックスな方法によっているが、自然音と人為音の体系を記述し、「環境の音」、「民俗の音」という枠組みを設定していく手法は、人類学にとってはきわめて新鮮なものである。本書では、歴史的研究の導入を除けば櫻井のもの以外にあまりないが、人類学以外の学問の手法を人類学的研究の中に導入していくことは、複雑な文化をもつ文明社会の研究において、今後ぜひとも必要とされる方向性だと思われる。

丸山孝一の「離島研究の一視座—巨文島を事例として—」は、離島には、中央文化との同一視を求める求心力と同時に、地理的に隣接する異文化に近いことにより、海外、異文化への飛躍を志向する遠心力が逆のベクトルをもって作用しているという視点から、全羅南道の巨文島の事例にもとづいて、島嶼文化一般の性格を考察したものである。

祖父江孝男の「韓国人の意識と行動—今日までの諸研究の比較考察—」は、1975年以降に刊行された12点の韓国文化論、韓国人論を概観し整理したもの、また、片山隆裕の「韓国における女性と儒教」は、韓国における儒教、巫俗、民間信仰と女性の関係をめぐる分野の研究史を整理・検討したものである。

さて、以上で検討してきたように、本書でもっとも具体的に示された新しい方法論は、文書資料を利用してフィールドワークのデータを歴史的な時間軸における変遷と結びつけていく手法であ

り、このような歴史的視点の導入と関連して、一つの村落をこえた次元で韓国の社会・文化の性格を理解していく可能性が示されている。反面、片山や依田の論文である程度示唆されているが、構造論や象徴論などの手法はあまり全面に出されていない。これは、これまでの日本における韓国社会の人類学的研究が、父系の親族組織を中心とする社会組織の分析に重心を置いてきたことと関連しているようである。本書の諸論考は、手堅いがややスタティックな印象を与える。つまり、フィールドワークを根幹とする学問ならではの社会のダイナミックな側面の分析が、本書ではあまり示されていない。松本の論考で示唆された植民地時代における政治的なせめぎあいの問題、近代化の過程における村落社会の変容の問題、あるいは現代における都市の問題など、本書では未開拓の興味深い分野が数多く残されている。本書で示された研究成果をふまえて、これらの未開拓の領域に取り組んでいくことによって、韓国社会の文化人類学的研究は、現代の日本で生活するわれわれの切実な課題に対応するものになっていくであろう。

参考文献

伊藤亜人 1977 「韓国社会における契—全羅南道珍道の事例—」『東京大学東洋文化研究所紀要』第71冊。

渡邊欣雄著

『民俗知識論の課題』

—沖縄の知識人類学—

島村恭則*

本書は、著者が提唱している民俗知識論に関わる論考を集めたもの。全体は5部から成る。民俗(的)知識とは、人類学者が調査・研究の対象と

※筑波大学大学院歴史・人類学研究所

するコミュニティに生活している人々の持つ「知識」（話者の頭脳にある情報と情報のコンテキストのすべて）のこと⁽¹⁾。この民俗知識の総体を、生活世界のあらゆる発露＝処方箋として研究対象にし、話者の知識（民俗知識）を研究者側の分析概念で分断することなく、できるだけ話者の知識そのものを脈絡として保持しようような解釈をほどこし一般化することが、著者のいう知識人類学の目的と方法だとしている⁽²⁾。

第I部は、民俗知識論序説というべきもの。同

一村落の同一民俗事象を異なる調査者が異なる機会に調査して報告したものを細かく読むと、各報告間に微妙な差異の存在することに気付かされることが多い。たとえば、沖縄県平良市松原における村落祭祀の拝所の祭神については、①宮古高等学校郷土研究クラブによる報告⁽³⁾、②比嘉政夫氏による報告⁽⁴⁾、③大本憲夫氏による報告⁽⁵⁾、と三種の調査報告がなされている。その中から「アガッザー御嶽」の祭神についての各報告を整理してみると表のようになる。

宮古高校報告	比嘉政夫報告	大本憲夫報告
ミルクガン	×	ミルクティン
ユクミシュー	×	ユクミシュー
ジドウヌス	×	ジドウヌカン
チョーヌヌス	×	チョーヌヌス
ユーヌヌス	ユーヌヌス	×
ティンヌマツカニ	×	×
×	マクヌヌス	×
×	クルマヌス	×
×	ダイキヌス	×

表：アガッザー御嶽の祭神名

表では、同じ行に同じ祭神とみなせる神名を三者の報告ごとに記載した。×印は他の報告には記載されているのに当該報告書には記載のないものを示す。このように整理してみると三者の報告間にはかなりの差異があることが理解できよう。か

かる傾向は他の拝所の記述でも見られることである。このことについて、比嘉氏は、宮古高校による記述を併載した上でその記述を「これは筆者のデータとかなりちがっている。どれが確かなものであるか判断がつきかねる⁽⁶⁾」と述べている。

また大本氏も、比嘉氏の報告の存在について言及した上で、大本報告ですべて大本氏自身の調査によるデータを用いる旨註記して記述を行なっているが⁽⁷⁾、別の箇所では、この差異の要因を各地で輩出している宗教的職能者の私的な観念の影響などに求め、一歩進んだ見解を述べている⁽⁸⁾。むしろ比嘉氏が指摘するように、これらの祭神には差異をこえて「畑を守る性格と豊饒を司る性格」⁽⁹⁾が共通して見られるものであろう。しかし、やはりこれだけの差異があるということを見せせずに、この村落には異伝がどの程度、どのような層を成して存在しているのか、異伝の存在に何らかの意味は見出せないだろうか、といった点を検討してみる価値があるのではなかろうか。だが、このような問題意識は大本氏のようにあるにはあっても、記述された情報がどのような立場の何という人からいかなる状況の中で聴取されたものなのかについての註記は大本報告を含めてどの報告でもなされておらず、民俗知識の差異、変化についての分析には未だ至っていない。この問題は今後の課題として残されているのである。

本書の著者はこのような民俗知識の存在様態について第1章で考察している。すなわち、民俗知識は成層性（民俗知識は当該コミュニティにおいて均質・平板に配分されているわけではないこと）・正当性（客観化され、すでに共有されている伝統的知識の正しさを、その知識の担い手が知識の受け手に対して説明し、知識の受け手の主観に客観的秩序のもとにある知識が形成される、正しさの証明過程—民俗知識の「正当化」—には四つのレベルがあるとしている）・拮抗性（コミュニティ内部には知識の闘争や葛藤がある）・伝統性と非伝統性（コミュニティには前代の知識を極力継承していこうとする反面、前代にはなかった知識を獲得しようとする要求もある）、の四つの観点から動的に検討され、さらに人類学者側の知識もまた再検討されるべきであるとし、こうした知識論なくして「偽りの民族誌」とか「正確な民族誌」といった安易な民族誌評価をすることを戒めている。

第2章では、人類学者にとって異文化であるフィールドにおいて、そこに暮らす人々にとっては自明の理であるが、異文化からやってきた者にとっては理解するのに困難極まりない慣例的知識を理解しようとする試みを、アムトゥガミなる神を例にとって行なっている。

第Ⅱ部は親族論となっているが、これも知識論の一環。第1章で沖縄社会研究の歩みをふりかえり、今後の課題として知識人類学的研究をあげている。これは、例として「門中」をあげるなら、研究者をして「門中」研究に向かわしめた社会人類学の「出自論」の背景にある研究者側の知識の検討と、民俗知識としての「ムンチュウ」（単に父系出自集団）などと規定できるものではなく、祖先との永代にわたる関係＝秩序に関するきわめて包括的な知識の体系である）を話者の知識体系に沿った形で解釈すべきだということである。第2章では「出自論」という人類学者側の知識をとりあげてその発生と展開とをあと付け、学者の分析概念もそれが形成された地域の民俗概念と無縁ではありえないと指摘。第3章では、第2章で指摘された分析概念と民俗知識とが切っても切れない関係にあるのだということをむしろ積極的にとらえ、沖縄の民俗知識でもって沖縄の親族関係がいかにか記述できるかを検討し、さらに、親族に関わる沖縄の知識体系と漢族の知識体系との比較を行なっている。そして、琉中共通の知識の骨格として「大樹分枝のイデオロギー」というモデルを仮説として提示し、これはまた第Ⅲ部でとりあげられる「風水」知識とともに〈流れの思想〉としてモデル化できるものであり、このモデルは研究者によって分析概念としても共有され得るものであると主張している。第4章では、叙上の議論を補うべく「家族」概念の民俗知識論からする再検討を提唱している。

第Ⅲ部は風水論。第1章では風水思想の概説を行ない、第2章では沖縄における風水知識の受容・普及・現状とその特色をまとめており、中国・韓国・沖縄のように民俗知識として「風水」知識を共有してはいない日本本土やヨーロッパの

研究者が、この知識を共有する地域の社会・文化を包括的に解明しようとする際にキーとなる風水知識を知識人類学的にどう理解し把握するべきかの見取り図を提示している。

第Ⅳ部は歌謡論。第1章・第2章ともに、東村〈東部祭区〉の収穫祭で歌われる神歌の伝承（変化）の実態や現実の儀礼行為と歌詞内容との対応を分析し、歌詞やその意味内容は絶えず変化をしており古い時代からそのままの内容が伝えられてきたわけではなく、また、コミュニティにとっての神歌の存在意義は神歌の内容にあるのではなくて神歌唱和儀礼というコミュニティへのプレゼンテーションのほうにこそあるのだと論じている。

第Ⅴ部は要約と結論に充てている。

以上、内容の要約をしてきたが、次に本書の内容に関し若干のコメントを試みたい。

(1)Ⅰ部で提唱されている民俗知識の諸特質をふまえた動態的把握に関しては、伝説の異伝に着目し、異伝の持つ意味について考察した研究⁽¹⁰⁾や、話者の体験とそれに対して話者が行なう意味付けに注目し、立場の相違する場合に体験として話された内容についての検討⁽¹¹⁾がなされたり、たとえば通過儀礼の記述にあたって、多くの場合、民俗研究者が話者として選定する年長者が語るのは、彼らが経てきた重層化した儀礼の体験であって、むしろそうした村落社会の性格と話者の選択の仕方が記述を「体系的」なものにしてきたのだ、というような考察⁽¹²⁾も行なわれてきており、本書の著者の主張と通じる、話者の知識や体験といったものをエミックに把握・記述しようという研究は今後さらに展開されていくことであろう。

(2)Ⅱ部では、研究者側の知識の有り様についての知識人類学的検討を行なった上で、民俗知識論の重要性に説き及ぶという興味深い論旨展開の形をとっているのだが、今後はここでとりあげられた「親族論」のみならず、さまざまな研究者側の知識についての検討がなされることが期待される。たとえば、著者が再三批判をしている〈民俗学〉や〈比較民俗学〉についての知識人類学など、

大変意義深いものになるのではないだろうか。

(3)Ⅲ部では、著者がここ数年精力的にすすめている風水研究の中から沖縄をフィールドにした論考のみをとりあげているのであるが、著者には漢族をフィールドとした風水知識論もある。特に「風水知識と世界観—漢族の墓地風水に関する議論をめぐって—」と題する論文⁽¹³⁾では漢族の持つ風水知識に見られる知識の成層性や正当性についての考察が展開されているのであり、本書Ⅰ部第1章での考察を具体的事例によってさらに進めたものとなっている。本書が対象地域を沖縄に限定しているからであろうか、この論文は収録されていない。だが、著者の民俗知識論を理解する上できわめて重要な論考であると考えられるので、せめて「補論」として要約を取めておいてくれたなら親切だったのではないだろうか。ともかく、民俗知識論の代表的論考であるこの論文をあわせて読むべきであることを指摘しておきたい。

(4)Ⅳ部にとりあげられた歌謡に関しては、著者が言うように、文学・言語・音楽の分野での研究が進められてきたのであって、これまでの沖縄研究において人類学者はこれをほとんどとりあげてこなかった。たとえば、「奄美沖縄民間文芸研究会」で歌謡に関する研究を展開するのは、山下欣一氏を除くと多くは、福田晃・古橋信孝両氏ら文学研究者達であった。だが、今後は著者のような人類学者と、彼ら「民間文芸」研究者達との議論が活発になっていくことが期待されるものである。たとえば、第1章の中で、現任祝女が神歌の歌詞の意味解釈を年代の経過にともなって次第に体系的・論理的なものに整えていく事例が紹介されているが、これなどは歌謡と説話との関係とか説話の生成・成長といった問題に大いに関わってくると思われ、歌謡はもちろん説話なども含めて広く「民間文芸」研究に知識人類学的視点を導入した研究が待たれるところである。なお、この部の2章において、著者は、日本民俗学が従来あまり批判をくわえることなく用いてきた「伝承」概念を再検討すべきだと述べている。これについては、民俗学内部においても近年検討がなされてきてお

り⁽¹⁴⁾、今後この種の「伝承」論がますます活発になっていくことであろう。

(5)本書にみられるような知識研究は、今後沖縄文化研究のみならず、あらゆる人類文化の研究において不可欠の視点となるであろうが、たとえば沖縄研究に従事する評者の最近の問題関心から言えば、〈現代〉の沖縄で活躍するシャーマン的宗教者達の持つ知識の形成過程についての検討を手懸けてみたいと思っている。沖縄に生まれた新宗教の中で最大手といわれる「龍泉」の教祖・高安六郎氏は、神からの啓示に従うとともに、教団草創期には民俗学や沖縄学の書物に多くを学びながら次第に教義の体系化を行なってきたのであり、最近では、世界情勢に関する法話や企業の経営者向けの法話を展開し、普遍性をより拡大する方向に向かっている⁽¹⁵⁾。また、ユタやそれに類する人々の中には、雑誌『ムー』を愛読し、「宇宙」とか「電波」とか「天体エネルギー」というような言葉や知識を導入して自己の宗教的世界を体系化する者がいたり⁽¹⁶⁾、神ダリー中の人の中には、神の命ずるままに各地のウタキ巡りをするとともに、書店に平積みされている幸福の科学・大川隆法シリーズを買い漁る者もいるのである。こうした現象を、短絡的に「沖縄伝統文化の崩壊」などと言って否定的にとらえるのではなく、ここにあげたような知識をどのように摂取し、あるいは拒絶するのかを、動態的にじっくりと見据えたいものである。

以上、本書の内容紹介と若干のコメントを試みてきた。著者はかつて、沖縄の民俗宗教研究史をまとめた際に、今後の課題として、単発的な事例研究ではなく、十分な事例を踏まえ、新傾向で俯瞰的でありかつ精緻な理論志向の持続的な研究が行なわれるべきだと述べている⁽¹⁷⁾。このような課題は何も宗教研究だけの問題ではなく、沖縄研究全体にいえることであろうが、本書にまとめられた民俗知識論はそのような課題にこたえようとして構想されたものにはかならないであろう。そして、このような民俗知識論が構想された背景には、著者の20年にわたる東村での持続的なフィー

ルドワークがあることを見落としてはならないのである。

註

- (1)本書13頁、112頁および173頁
- (2)本書174頁
- (3)宮古高等学校郷土研究クラブ機関誌『郷土』3、ただし、現在本書の入手はきわめて困難であり、本稿では比嘉氏の記述から引用したことをお断りしておく。
- (4)比嘉政夫「祭祀集団と村落社会—宮古を中心として—」九学会連合編『沖縄—自然・文化・社会』弘文堂、1976
- (5)大本憲夫「沖縄宮古群島の祭祀体系」『民俗学研究所紀要』6、成城大学民俗学研究所、1982
- (6)前掲註(4)395頁
- (7)前掲註(5)250頁
- (8)前掲註(5)212頁
- (9)前掲註(4)395頁
- (10)斎藤純「異伝の持つ意味—農村の村開発伝承を例として—」『足立区立郷土博物館紀要』5、1988
- (11)古家信平「体験の民俗」『長野県民俗の会会報』13、長野県民俗の会、1990
- (12)古家信平「儀礼の意味づけ」『第38回日本民俗学会年会研究発表要旨』1986
- (13)渡邊欣雄『風水思想と東アジア』人文書院、1990所収
- (14)大月隆寛「常民・民俗・伝承—開かれた民俗学へ向けての理論的考察②—」『常民文化』9、成城大学大学院日本常民文化専攻院生会議、1986
高木史人「昔話の伝承動態・β—昔話の伝承形態・伝承機能モデルを越えて—」『長野県民俗の会会報』12、1989
高木史人「昔話伝承研究の課題—昔話の伝承動態・γ—」『昔話—研究と資料—』18、日本昔話学会編、1990
- (15)拙稿「沖縄に生まれた新宗教—龍泉—」『フィールド・伝統・創造—日本民俗学の展望—（仮

題)』1991刊行予定

(16) 新城定吉『成功と失敗への道—天体エネルギーへの接近—』私家版, 1985

新城定吉『宮古島の神秘的な石庭』月刊沖繩社, 1988

(17) 渡邊欣雄『沖繩の社会組織と世界観』283頁, 新泉社, 1985

(1990年8月, 凱風社刊)

張紫晨著

『中国巫術』

烏丙安著

『神秘的薩滿世界』

色音*

上海三聯書店から中華本土文化叢書として張紫晨教授の『中国巫術』(1990年7月版)と烏丙安教授の『神秘的なシャーマニズムの世界』(1989年6月)が出版された。張教授と烏教授二人とも有名な民俗学家であるが、それぞれの立場から中国のシャーマニズムについて論じた。張教授の著作は中国漢民族の伝統的な巫術を中心に展開したが、烏教授の著作は中国少数民族のシャーマニズムを中心に展開したものである。両方ともシャーマニズムについて論じているがその重点点が違って、それぞれの特徴がある。シャーマニズムの定義について広義と狭義の二つの説があるが、張教授の立場は広義説に属するもので、烏教授の立場は狭義説に属するものである。

張紫晨教授の『中国巫術』は書名通り中国巫術を中心に論じ、中国巫術をシャーマニズムと関連しながら考察したものである。エリアーデ、張光直教授らを始め、数多くの学者達は中国の巫術を広い意味でのシャーマニズムとして把握してきたが、張紫晨教授も中国巫術をシャーマニズムと深く関係があると認め、その歴史的関連とそれぞれ

*筑波大学大学院地域研究科

の特徴を本書の第十二章では詳しく論述したのである。著者の学際的視点から中国巫術を切り込もうとした試みは本書の目次でははっきりしている。その目次は次の通りである：

一章、巫と巫術

- (一) 巫と巫術の関係
- (二) 中国の伝統的觀念から見る巫
- (三) 海外人類学界が見る巫
- (四) 巫と巫術に対する宗教学の觀念
- (五) 巫と巫術に対する民族学の觀念
- (六) 民族誌に見られる我が国の各民族の巫と巫術活動に関する記述

二章、巫術及びその原理

- (一) 巫術, 巫法, 巫技
- (二) 巫術の施行
- (三) 巫術の原理

三章、祭祀的巫術

四章、驅鬼的巫術

- (一) 祭鬼
- (二) 驅鬼

五章、招魂的巫術

六章、祈子的巫術

七章、医療的巫術

八章、生産に対する巫術

九章、建築に対する巫術

十章、敵に対する黒巫術

十一章、東巴教における巫術

十二章、シャーマン教における巫術

十三章、中国巫術と中国文化

- (一) 我が国の政治, 歴史における巫術の役割
- (二) 中国巫術と道教
- (三) 中国巫術と文芸
- (四) 中国巫術と民俗
- (五) 中国巫術と中国文化心態

以上の十三章から成るこの本では、著者が多元的研究方法で中国巫術の多面(様)的性格を分析し、中国社会に果たした巫術の役割を豊富な文献資料によって指摘した。巫と巫術の関係について巫術は前に形成し、のちになって巫が現われてきた